

小説『過去と今を重ねて、未来へ』(原体験をキャリアに活かす相談)

登場人物紹介

佐伯 美咲(さえき みさき)

30歳。中堅メーカーの事務職として勤務。

子どもの頃から絵を描くことが好きだったが、進学・就職では安定を優先し、創作からは距離を置いてきた。

社内広報のチラシづくりを手伝ったことをきっかけに、忘れていた「伝わる喜び」を思い出し、キャリアに活かすべきか悩み始める。

西園 智久(にしその ともひさ)

62歳。元メーカー人事部。現在は地域のキャリア相談室で活動するキャリアコンサルタント。

落ち着いた雰囲気と比喩を交えた語り口で、クライエントが自分の歩みを時間軸で整理できるよう支援している。

本作では「キャリアは塗り重ねの絵画」という比喩を用いて、佐伯に気づきをもたらす。

0章 プロローグ — 退勤後のノート

退勤の打刻を終えると、社屋のガラスに貼りついた夕焼けがゆっくり色を薄めていった。駅までの道は、ビル風に押されて足早になる人たちで混み合っている。佐伯美咲は、人の流れから半歩だけ外れて、角のカフェに入った。ガラス越しの通りはにぎやかなのに、店内だけが別の時間を生きているみたいに静かだった。

いつもの窓際に座り、ノートを開く。表紙には、何度もバッグの中で擦れた白い傷が走っている。ページの中ほどに、数日前の走り書きが残っていた。

「わたしは、なぜ今の仕事をしているんだろう。」

正確に言えば、答えはある。「安定しているから」。親にも、自分にも、何度もそう説明してきた。説明は筋が通っていて、誰も困らなかった。——困らなかった、はずだ。

ノートにボールペンを置きながら、ふいに思い出す。社内イベントのチラシづくりを、広報の山下さんに頼まれた日のこと。休日に撮った写真を使って、色を選び、文字の大きさを整えた。誰でもできる軽作業だと思って引き受けたのに、やってみると、胸の内側がひらいて

いく感覚があった。久しく味わっていなかった種類の静かな高揚。

掲示板に貼られたチラシの前で、見知らぬ同僚が言った。「雰囲気、出てますね」。何でもない一言なのに、その日を境に、仕事帰りの足取りがほんの少しだけ軽くなった。

けれど、同じくらいの重さで、考えも増えた。「これは、昔の自分に引き戻されているだけなのかな」。過去の“好き”が懐かしさの衣装で現れて、いまの生活を揺らしているだけなのではないか。

蒸気の抜ける音。店員がカップを置くやわらかな響き。窓の外の信号が青に変わる。ページの余白に、新しい言葉が浮かんでくる。

「戻る、ではなく、重ねる。」

明日、会社近くの相談室に行く。予約のメールには「キャリア面談」とだけある。大げさだと思っていたけれど、今はその言葉に救われる気がした。

人生が一枚の絵なら、これは“上塗り”的の一回なのかもしれない。下地は消えない。けれど、色は変わる。塗り重ねた先に、まだ見たことのない輪郭が立ち上がるのなら——。

ノートを閉じる。外の群青はさらに濃くなり、街は夜の形に切り替わっていく。明日の自分に少しだけ期待して、佐伯は席を立った。

1章 面談の始まり — 糸口をほどく

翌日の午後、ビルの五階。「地域キャリア相談室」と書かれたプレートの前に立つ。ドアを開けると、浅い木目の机と、観葉植物。壁に掛けられた静かな色の抽象画が、空気の角を丸めている。

「どうぞ」

声の主は、六十代前半くらいの男性だった。名札には「西園 智久」とある。スーツは濃紺、ネクタイは控えめな灰色。椅子に腰かけると、彼は湯気の立つ白いカップを差し出した。

「温かいもの、苦手じゃなければ」

「ありがとうございます」

西園は、スタートの合図を待つように視線を下げ、ペンを軽く指に挟んだ。その沈黙が、慌てずに話していいと告げている。

「予約のときに少し書きましたが……いまの仕事をこのまま続けるのか、別の形を探すのか、もやもやしていて」

「もやもや、ですね」

「はい。きっかけは、社内イベントのチラシづくりを手伝ったことです。たいしたことではないんですが、作っているとき……楽しくて。帰り道、久しぶりに“まだ何かできるかも”って思いました」

西園は頷く。頷き方が、こちらの言葉を一つずつ机の上に置いて並べていくようで、佐伯は自分の声が急がなくてよくなるのを感じた。

「ただ、それって昔の感覚に引っ張られているだけなのかな、とも思って。子どもの頃、絵を描くのが好きで。美術部でした。でも結局、就職では安定を選んで事務職に」

「昔の“好き”と、いまの“楽しい”が重なった、ということですね」

「……重なった、ですか」

「ええ。過去に“戻る”のではなく、いまの生活の上に“重なる”ことがあります。同じ色でも、下地が違えば見え方が変わる。佐伯さんの生活、責任、役割——それらの上にのった色は、子どもの頃の色と同じ名前でも、同じ色とは限らない」

喉の奥で、小さな音が鳴る。納得に追いつくために、体がひと拍遅れる。

「では、今日は糸口を三つほど、ほどいてみましょう」

西園は手帳を開き、さらさらと見出しを書く。

- ① 過去——“好きだったこと”の質感
- ② 現在——“上塗りの瞬間”に起きたこと
- ③ 未来——“広げ方”の候補

「まず①。『好きだったこと』の“何が”好きだったのか。描くことそのものなのか、誰かに見せることなのか、物語を作ることなのか。思い出せる範囲で、言葉を置いてみてください」

佐伯は、胸あたりに指を当てて、ゆっくり息を吸う。記憶の箱のふたを開けるように、慎重に。

「……紙の上に、静かに線が出てくる感じが好きでした。静かなんですけど、消しゴムで消せばまたやり直せる、あの余白の安心感も」

「手触り、ですね。素材の感覚」

「はい。それから、祖母に見せると『まあ、ようできとるねえ』って言ってくれて。褒められるのは嬉しかった。けど、ただ褒められたいんじゃなくて、『伝わった』感じがしたんです。『これ、朝の光みたいだね』とか、祖母が別の言葉で返してくれるのがたまらなくて」

「“伝わる”がキーワードかもしれません」

西園は二本線を引き、横に小さく「素材」「伝達」と書き添える。
彼の文字は丸みを帯びていて、ノートの上で音を立てずに着地する。

「では②。チラシづくりの“上塗りの瞬間”には、何が起きていたでしょう。誰の、どんな言葉が、どんなタイミングで触れたか」

「ええと……色味を少し落として、写真の余白を広めにしたんです。すると、文字が目立ちすぎなくなって。掲示した日の夕方、通りかかった人が『落ち着いてて、見やすい』と言ってくれて。『雰囲気が伝わる』とも」

「伝わる」

「そう。昔の“伝わる”と、今の“伝わる”が、線で結ばれた気がしました」

西園は顔を上げる。目元に、火を強くしない焚き火のような、一定の温度が灯っていた。

「③に入る前に、ひとつだけ確かめたいことがあります。『安定を選んだ』とおっしゃいました。あの選択は、誤りだったと思いますか？」

問い合わせは、責める角度を持たない。ただ、影の輪郭を確かめるみたいに、静かに置かれた。

「いいえ。あのときの自分には必要でした。親の言葉も、現実も、全部ひっくるめて、わたしが決めたことです」

「では、“正しかった選択の上に、新しい一筆を重ねる”という前提で考えられそうですね」

胸のあたりで、固まっていた何かがほどける。過去を否定して未来へ行くのではなく、過去を含んだまま未来へ行ける。そう思えた途端、視界の奥行きが一段増す。

「③——広げ方の候補。社内での役割の中に小さく実験できる余白はありますか。例えば、次の社内掲示物のテンプレート作成、部署内の月報レイアウト、あるいはイベント写真の整理。『専門部門がないからできない』ではなく、『専門部門がないからこそ、最初の型をつくる』」

「……できるかもしれません。山下さんも、毎回手作業で大変そうで」

「もう一つ。外側——学びの上塗りです。短期のデザイン講座、色彩検定、あるいは写真の講評会。いずれも“戻る”ではなく“重ねる”という姿勢で」

「重ねる、ですね」

西園がペン先で小さな丸を描く。丸はいくつかの点をやわらかくつなぎ、ひとつの環になる。

「最後に、今日の言葉から、持ち帰る“仮の行動”を二つ。完璧でなくていい。『次の一筆』として」

「一つ目は、広報の山下さんに“テンプレート案”的相談。二つ目は、近所のカルチャーセンターの講座を調べる——でどうでしょう」

「良いと思います。期限を自分で決めましょう。『来週の金曜までに』のように」

佐伯は手帳を開き、日付に小さな星印をつけた。星は、いまここにいる自分から未来へ向けた、控えめな光の目印だ。

「ところで」

ページを閉じかけたとき、西園がゆっくり言葉を置いた。

「キャリアは、一枚で完成する絵ではありません。今日の一筆は、次の一筆の“下地”にもなります。塗り重ねは、やがて年輪のように残ります。大切なのは、自分で自分の絵を見続けることです」

言葉が、胸の奥に音もなく沈んでいく。沈んだ先で、小さく灯がともる。

面談室を出ると、午後の光はまだ窓辺に残っていた。エレベーターホールの鏡に、一瞬だけ目をやる。映った自分は、昨日より少しだけ輪郭がはっきりして見えた。

2章 過去 — 原体験の記憶

家にあった六畳間は、祖母の手芸道具と古いちゃぶ台で半分が埋まっていた。夕方になると、台所から味噌汁の香りが漂ってきて、祖母は糸を通した針を指先でたぐりながら「美咲、宿題は終わったんか」と声をかけてきた。

その横で、美咲はスケッチブックを広げ、鉛筆を走らせていた。

線が白い紙の上に現れていくときの感覚——まるで自分の内側の音を、紙が代わりに奏でているようだった。輪郭が形をなすたび、胸の奥が少し軽くなる。消しゴムで消しても、また描き直せばいい。その余白の安心感が、彼女を何度も紙へと向かわせた。

「まあ、ようできとるねえ」

祖母は、できあがった絵をのぞき込み、手元の針を止めてそう言った。単なるお世辞ではなかった。祖母は必ず一言、自分の言葉を添えてくれる。

「この影のところ、朝の光みたいやなあ」

「この花、ちょっと笑うとるみたいや」

その一言に、美咲の胸は満ちた。描いたものが「わかった」と伝わる瞬間。自分の線が、別の言葉になって返ってくる。その体験が、静かに心の奥に沈殿していった。

中学に入ると、美術部に入り、ポスター制作を任せられることが増えた。夏休み前、文化祭の告知ポスターを徹夜で仕上げたことがある。教室の隅でひとり絵の具を重ね、空が白むころに筆を置いた。完成したポスターを掲示板に貼ったとき、クラスメイトが口々に言った。

「これ、目立つね！」

「楽しそうな雰囲気が伝わる」

そのときの高揚感は、祖母から返ってきた言葉と同じ系統のものだった。誰かに「うまいね」と褒められる以上に、「伝わる」と返されることのほうが、彼女にとっては格別だった。

だが、高校三年の進路相談の机の上では、その感覚は影を潜めた。教師は言った。
「美術大学を目指すとなると、浪人覚悟になるぞ。学費も高いし」

父は静かに言った。

「安定した職に就ける学部に行きなさい。好きなことは趣味で続ければいい」

机の上で両手を組み、うつむいたまま頷いた。正しい言葉に囲まれると、それ以外の選択肢は、次第に声を失っていく。美咲は経済学部へと進学し、就職活動では迷わず事務職を選んだ。

あのとき封じ込めたものは、「夢」ではなかったのかもしれない。むしろ、「伝わる喜び」という日常に根ざした感覚だった。だが社会に出てから十年、その感覚を思い出すことはなかった。机の上の書類に数字を打ち込み、会議の議事録を整え、電話を受ける日々。生活は平らに進み、波立つことなく過ぎていった。

そして、あの日。広報の山下に声をかけられた。

「佐伯さん、イベントのチラシ作成、ちょっと手伝ってもらえないかな」

画面の中で余白を広げ、色を調整していたとき、十数年前の祖母の言葉が不意に甦った。
——「朝の光みたいやなあ」。

過去と現在が重なり合い、薄い膜が破れるように、内側にしまいこんでいた感覚が顔を出した。

3章 現在 — 上塗り体験の発見

イベントの準備は、部署の誰もが忙しく動き回る中で始まった。会議室の机にはパンフレットの束や段ボール箱が積み上がり、蛍光灯の光に紙が反射してまぶしかった。

「佐伯さん、ちょっとお願ひしていい？」

広報の山下が、資料の間から声をかけてきた。モニターの画面には、粗く作られたチラシの原案が映っている。文字が大きすぎて、写真が隠れていた。

「全体のバランスを整えたいんですけど、手が足りなくて……。センスあると思うんですね、佐伯さん」

その何気ない一言で、心の奥に沈んでいた絵筆の記憶がふと動いた。

「私でよければ」

軽く答えながらも、胸の鼓動はほんの少し速くなっていた。

空き時間を見つけて、デザインソフトを開く。写真を配置し、文字の大きさを変える。余白

を広げて呼吸を持たせる。線や色の加減を整えるうちに、時間の感覚が薄れていった。

画面の中で線が整う瞬間、子どもの頃スケッチブックに描いた線の感覚が、鮮やかに重なった。違うのは、祖母が隣にいるのではなく、同僚や社員に伝わる形を意識していること。

完成したチラシを印刷し、掲示板に貼ったのは金曜日の夕方だった。通りかかった営業の若手が立ち止まり、「見やすいですね」「雰囲気出ます」と言った。

その言葉は、十数年前に祖母がかけてくれた「朝の光みたいや」の記憶と同じ響きを持っていた。

——“伝わる”が返ってきた。

胸の奥で、小さな火が灯る感覚がした。久しぶりに、誰かに届いた実感。

それは懐かしさではなく、今この瞬間に確かに起きていることだった。

その夜、帰宅してノートを開いた。

「これは単なる懐古じゃない」と書き留めた。

「いまの自分が、この仕事の中で“伝える喜び”をもう一度感じているんだ」と。

翌週の会議で、山下が言った。

「このチラシ、評判いいよ。来月もお願いできる？」

頼られることの心地よさと、責任を任される緊張感。その両方が新鮮だった。

それはかつての“夢”的書き直しではなく、大人になった自分に“上塗り”された新しい色だった。

美咲はそのとき初めて思った。

——キャリアって、一枚で終わる絵じゃないのかもしれない。

4章 未来 — 発展性への問いかけ

「では、ここからは“未来”について考えてみましょうか」

西園は机の上に置いた手帳を指先で軽く叩いた。穏やかな声だったが、言葉は真っすぐに届いた。

「過去の“好き”と、現在の“楽しい”が重なりました。では、その線をどんな方向に延ばしていけるでしょう」

佐伯は、少し間を置いて口を開いた。

「うちの会社には、広報専門の部署はないんです。だから、本格的にデザインを任せてもらえる環境ではないと思います」

「なるほど」

「ただ……小さな仕事ならできるかもしれません。掲示物のテンプレートを作るとか、部署内の報告資料を見やすく整えるとか」

「いいですね。それは“社内で小さく実験する”という未来の形です」

西園はノートに丸を描き、その中に「小さな実験」と書き込んだ。

「それから、会社の外もあります」

「外……？」

「はい。学び直しや副業としてのチャレンジ。たとえばデザイン講座や色彩検定を受ける。あるいは地域のイベントチラシをボランティアで作ってみる。そうすれば、社内の経験と社外の経験が重なって、より厚みを持った枝になります」

“重ねる”という言葉が、また心に留まった。

「戻る」ではなく「重ねる」。

祖母に褒められたあの日の記憶に、いまの自分の生活と責任が上書きされている。そこにさらに新しい行動を重ねることで、未来の可能性が枝分かれしていく。

「でも……もし挑戦して、失敗したらどうでしょうか」

自分でも不意に出た問いただった。声がわずかに震えていた。

西園は微笑んだ。

「失敗は“消しゴム”的なものです。紙そのものは残ります。描き直しは可能です」

その比喩に、胸が軽くなるのを感じた。

「未来は、原体験の延長線上にあるとも言えますが、同時に“上塗りの積み重ね”もあります。佐伯さんの場合、過去の根っこは“伝わる喜び”。現在はチラシ作成という上塗りでそれが再び芽を出した。未来は、その枝葉をどう広げるかです」

西園は、ノートの余白に三本の線を描いた。

過去:好きだったこと(根っこ)

現在:上塗りの体験(幹)

未来:広げ方の候補(枝葉)

「この三つが一貫してつながれば、キャリアの物語は厚みを増していきます」

佐伯は、その図を見つめながらゆっくり息を吐いた。

「……やっと、過去と今と未来が、同じ紙の上に並んだ気がします」

5章 クライマックス — 重ねるという気づき

相談室の空気が少し柔らかくなった。ノートに描かれた三本の線を見つめながら、美咲は胸の奥に浮かんでくる言葉を確かめる。

「……私は、昔の“好き”を無理に引っ張り出したんじゃないんですね」

「ええ」

「いまの自分の生活に“上塗り”された形で、もう一度顔を出してくれた。だから、これは“戻る”んじゃないくて、“重ねる”なんだ」

言葉にした瞬間、自分の声が自分に届いた。静かな確信が、体の芯に広がっていく。

西園はゆっくり頷いた。

「その通りです。キャリアは一枚の絵画のようなもの。完成したら終わりではなく、何度も色を重ね、質感を変え、光を足していく。ときには塗り直しもある。その上塗りの跡が、他の誰にもない“あなただけの絵”になるんです」

美咲は、息を吸い込み、吐き出した。肩の力がほどけていくのが分かる。

「私は、“過去の夢を取り戻す”ことに縛られていたのかもしれません。でも……違うんですね。過去は消えなくても、今の上に重なるからこそ意味があるんだ」

「そうです。そして未来は、その重なりをどこに広げるか、どんな枝を伸ばすか自分で決める段階です」

窓の外を見やると、午後の光がゆるやかに傾いていた。淡い陽射しが葉の表面に映えて、緑が少し金色を帯びて見える。まるで幹から新しい枝が芽吹いているように。

「小さな一步でも、塗り重ねは残ります。ですから、今日決めた二つの行動——社内のテンプレート提案と、講座探し。それが次の一筆になります」

美咲は頷いた。頭の中では、来週の金曜日に山下へ声をかける自分の姿が浮かんでいた。言葉はまだ緊張で固いかもしれない。でも、ノートに書いた星印が道しるべになるだろう。

「——キャリアって、一度きりの選択の絵じゃないんですね」

「ええ。塗り重ねるたびに、絵は変わり、深みを増す。そして、それを見続けるのは、他でもないあなた自身です」

静けさの中で、二人の言葉が重なった。

それは、過去に光を当てるものでもなく、未来を描ききるものでもない。

ただ、“今ここで気づいたこと”が、確かに次へつながる合図になっていた。

6章 エピローグ — 星印のノート

相談室を出ると、外の空気は夕方の柔らかさをまとっていた。ビルの谷間に落ちる光が、街路樹の葉を透かし、緑と金色がまじり合って揺れている。

美咲は足を止め、深く息を吸った。胸の奥に、ほんの少しの張りと、心地よい軽さが同居していた。

帰り道、ふと昨日と同じカフェに寄った。窓際の席に腰を下ろし、バッグからノートを取り出す。ページを開くと、前夜の走り書きが目に入る。

「戻る、ではなく、重ねる。」

その下に、新しい行を加える。

「過去＝根っこ、現在＝幹、未来＝枝葉」

「次の筆：テンプレート案を山下さんに相談」

「次の筆：講座を探す（金曜まで）」

ペン先が紙の上で止まる。書かれた言葉を見つめると、一本の線がノートの中でつながっていくのが分かる。幼い日に祖母からもらった「伝わる」という喜び。それが、いま再び息を吹き返し、未来に広がろうとしている。

窓の外の信号が青に変わる。人の流れは急ぎ足のままだ。けれど、その波の中にいる自分だけは、少しだけゆったりと歩ける気がした。

ノートの余白に、そつと小さな星印を描き足す。

それは、未来に向かうための合図であり、過去と今を結んだ印でもあった。

——キャリアは、一度きりの絵ではない。

何度でも塗り重ねて、枝葉を伸ばすことができる。

その確信を胸に、美咲は夜風の中へと歩き出した。

—終わり—

Stories on the way.

巻末解説

1. ホラントの RIASEC モデルと原体験

ジョン・ホラントの職業興味モデル(RIASEC: Realistic, Investigative, Artistic, Social, Enterprising, Conventional)は、人の職業的興味を六つの領域で示します。この傾向は、幼少期から青年期にかけての「原体験」によって形づくられることが多いとされています。

例えば、本編の佐伯美咲のように「絵を描くことが好き」「誰かに伝わった喜びを感じた」といった体験は、Artistic(芸術的) や Social(社会的) の興味に根を下ろすことになります。

2. スーパーのライフスパン・ライフスペース理論

ドナルド・スーパーは、キャリアを「ライフスパン(生涯発達)」と「ライフスペース(生活役割)」の両側面から捉えました。

人は一生を通じて成長し、役割のバランスを変えながら自己概念を発達させていきます。この理論から見ると、幼少期の体験は 自己概念の初期的な核 ですが、大人になってからの経験によって自己概念は「上塗り」され続ける のです。

3. 「原体験」と「上塗り」の関係

キャリア支援の現場でよくあるのは、「子どもの頃の夢に立ち返る」アプローチです。

しかし、原体験だけを絶対視すると、「過去に縛られる」危険があります。

本編で描いたように、大人になってからの経験が原体験と重なり合うとき、新しい枝葉として未来に広がる可能性が生まれる のです。

原体験 = 根っこ(基盤の感覚や価値観)

現在の経験 = 幹(上塗りによって立ち上がる姿)

未来の可能性 = 枝葉(発展性、方向性)

この三層構造で捉えると、キャリアの一貫性と発展性を同時に説明できます。

4. 支援者の視点

キャリアコンサルタントが大切にしたいのは、クライエントに「過去→現在→未来」という時間軸を体感してもらうことです。

過去を振り返り、自己概念の源流を見つける
現在の経験を整理し、上塗りの意味を捉える
未来を小さな実験や学びとして描き出す

この流れを通して、クライエントは「自分のキャリアは一枚の完成図ではなく、塗り重ねの過程である」と理解しやすくなります。

キャリコン視点での振り返り

1. 主訴の把握と関係構築

佐伯さんは「広報の補助でデザインに関わり、昔の感覚が戻ってきたが、それをキャリアに活かすべきか悩んでいる」と語りました。

ここで大切なのは、過去への懐古に留まらず、現在の経験がどう意味づけられているかを丁寧に聴く姿勢です。

最初に「もやもやしていますね」と言葉を返すことで、感情を受け止め、語りを促す関係づくりにつなげています。

2. 時間軸を意識した問いかけ

面談では「過去・現在・未来」という時間軸に沿って整理しました。

過去(原体験)：「何が好きだったのか」「誰にどう伝わったのか」

現在(上塗り体験)：「チラシづくりのどんな場面で喜びを感じたか」

未来(発展性)：「それをどの方向に広げたいか」

この構造は、クライエントが自分のキャリアの一貫性と発展性を可視化するのに有効です。

3. 自己概念の再確認

佐伯さんの核は「伝わる喜び」でした。

この核をキャリコンが拾い上げて言葉にすることで、本人が「自分のキャリアの中心」を再確認できました。

自己概念を言語化してもらうことは、キャリア選択に自信を与える大切なプロセスです。

4. 比喩の活用

「キャリアは一枚の絵画のようなもの。完成ではなく、塗り重ねていく」という比喩を用いる

ことで、抽象的な概念を具体的なイメージに変換しました。

比喩はクライエントの理解を助けるだけでなく、感情に響きやすい点がメリットです。

5. 行動へのブリッジ

面談の最後に「小さな行動を二つ」具体化しました。

社内でテンプレート案を提案する
講座を調べる

これは 自己効力感を高める行動課題 です。大きな目標を提示するのではなく、「試せる一步」を設定することで、現実的な行動につながりやすくなります。

6. 支援の留意点

- ・ 過去の夢を無理に「取り戻させる」方向に誘導しないこと。
- ・ 現在の役割や責任を尊重し、そこにどう「上塗り」できるかを共に探ること。
- ・ クライエントの語った言葉をそのまま「キーワード」として返すこと(例:「伝わる」)。

これらによって、クライエントは 過去と現在をつなぎ、未来を描く力を自ら育てていく ことができます。

あとがき

本作「上塗りの枝葉に芽吹くもの」は、幼少期の「原体験」と、大人になってからの「上塗り」の関係を描いた一編です。

私たちは時に「昔の夢」に引き戻される感覚を覚えることがあります。けれど、それは単なる懐古ではなく、いまの自分の生活や責任の上に重ねられた“新しい芽”なのかもしれません。過去の根っこが現在の幹を支え、未来の枝葉に広がる——その流れを理解すると、自分のキャリアの時間軸に一貫性と発展性を見いだせるようになります。

キャリアは、一度の選択で完成する絵ではありません。人生のどこかで塗り直し、色を重ね、質感を変えていくことができます。その跡こそが「その人だけのキャリアのキャンバス」になるのだと思います。

この物語を通して、「過去に戻る」のではなく「過去を重ねる」という視点が、読者のみなさんの歩みのヒントになれば幸いです。

2025年秋 筆者